

それぞれの秋

佐々木信子

昨夜の天気予報では、今朝は強風雨になるようだったが、リビングのカーテンを開けて庭を見ると、柿の木は実も落せず、枝を広げ、はずれた予報を笑って輝いている。雨も降らなかったのか、庭は乾いているように見える。AIによる天気予報でも、あくまでも予報なので当日になってみないとわからない。

六十九歳の陽子が、福岡市内の長年住み慣れた集合住宅から、故郷の小さな借家で一人暮らしを始めて、もうすぐ三年目の秋になる。山を背にした四十軒ほどの集落だが、雑木林に入れば野栗やアケビの実を探し、近くで飛び立つ鳥の羽音を耳にすると、帰郷してよかつたと思う。

陽子が約四十年間連れ添った夫と離婚したのは、老後は一人で故郷の自然の中で、ゆっくりと暮らしたかったからだ。

現役時代は会社と主婦業を優先し、自分自身の時間は削って暮らしてきた。今でこそ「働き方改革」と耳にするが、陽子の頃は日々の残業が、当然のような風潮だった。

三十数年前の陽子は、ママチャリに一人っ子の清彦を乗せて保育園へ向かい、次はバス停から満員バスに揺られて職場へ向かった。そして、清彦が病気になる保育園から連絡があり、そのたびに早退して迎えに行った。

もう、あの頃の体力はないし、清彦が中学校を卒業するまでの間に、彼への愛情は使い果たした気がする。ただ何をするにしても「早くしなさい」が口癖で、ゆっくり穏やかに接していなかった。まるで促成栽培で育てたようだ。その影響か、現在の物理的な距離が遠いのも同じように、清彦も遠い存在になっていた。

十数年前に郊外の一軒家を買う話を夫婦で検討していた



頃、清彦が結婚して嫁の実家で暮らし始めた。

「婿入りと一緒にじゃないか、それも事後報告で。定年後に帰郷するわけがない。もう家を買うのはやめた」

夫は住宅会社から取り寄せたパンフレットをゴミ箱へ投げ入れたが、陽子の中では、公営住宅の狭い部屋に住み続けることに、小さな抵抗感が膨らみ始めていた。

陽子は同じ年の夫とは、共に六十五歳で定年退職し、その後一年間は一緒に暮らした。

「定年後の家事は手伝う」と夫は言っていたが、起床後は着替えもせず、リビングのソファでテレビを相手に過ごしていた。たまの外出も、そのままの服装でコンビニへ行くだけだった。夫が言う「家事を手伝う」との表現は間違いだ。無職の夫婦が家にいるのだから、二人で働くのは当然ではなかったのか。

「サラリーマン時代には束縛されていたから、これから自由に生活する」

退職した夜に、不似合いな赤いバラの花束を抱えて帰宅した夫だったが、自由な生活とはソファに寝転がり一日過ごすことだった。

「わたしも主婦を退職して一人で自由になります」

と宣言したのは定年から一年後で、夫が植物なら、ソファから投げ出した足から発芽して、リビングで大きな葉を広

げた頃だ。

「へっ、えっ」

好物のポテトチップスの袋を抱えた夫は、ソファから起き上がった。足元からプチプチと根が切れる音がしなかったのは、発芽の条件が揃っていなかったからだろう。その代わり、胸にこぼれていたポテトチップスの欠片が、夫の足の甲に降り注いだ。足の人差し指に寄りかかるような格好の、親指の付け根に黒い数センチの毛を見た時、あー、この人は男性だったのだと陽子は思った。

「えっ、僕が主夫になるってわけ？」

夫は陽子と別れることより、家事のすべてが自分の負担になることに驚いていた。

「きれいな空気の故郷で暮らしたいの。時間に振り回されずに漂いたい。それに、野の花や野鳥にも興味があるから」

「この家には空気清浄機がある。好きな花は花屋から取り寄せられるし、鳥はペットショップで見られるだろう」

夫は空のポテトチップスの袋を、両手で潰しながら言った。こんな答えを出す人だから同居はしたくないのだ。結婚とは熱病のようなもので、高熱の中で判断し実行してしまつたと陽子は思っているが、当時の夫の心境はわからない。

「へび、ムカデ、カにハエも多いだろう」

今度は恐怖心であおり始めた。ムカデには苦い思い出がある。毎年旧盆には清彦と帰省したが、彼が小学生一年生のときにムカデを素手で掴もうとして、手首を咬まれてしまった。傷口は赤紫になり、指先から肩までは野球のバットのようには腫れてしまった。近所の診療所に駆け込み点滴をしたが、腕の腫れは十日間も続いた。以来、夫は清彦同伴の帰省を禁止した。

昔、遊技場に「モグラ叩き」というゲームがあった。いくつもある穴の中から、場所を変えて顔を出すモグラを、手にしたハンマーで叩く遊びだ。陽子が、食洗機、掃除ロボットを購入を相談するたびに夫は反対した。結局、自分の小遣いで買ったけれど、当時の陽子はモグラ叩きのモグラだったと思っている。

「毒虫は田舎だから無数にいるわ」

そんな脅しで怯む陽子ではなかった。子供の頃は裸足で遊び、へびの尻尾を掴んで池に放り投げたりしていた。

「イノシシ、サル、アナグマだっているから退屈しないのよ」

最後に、「あなたみたいに」と言いたかったが、下唇を噛んでやめた。

「わかった。食器も洗わなかったからな」

やっとテレビをオフにした夫が言った。離婚に同意するまでは長期戦を覚悟していたが、意外にも早すぎる結果に陽子は余力の扱いに戸惑った。夫も一人になったのかもしれない。野菜中心の減塩食事から解放され、脱ぎ捨てた靴下を掃除ロボットに飛ばされて捜す必要もなくなるのだから。

陽子の故郷には生家はもうないが、三歳下の二人の幼なじみがいた。

周作は肥育牛生産農家だったが、六十歳で撤退して米と野菜を作っていた。

英雄は六十三歳で電力会社を退職して、自称「悠々自適」の暮らしをしていた。

二人の共通点は独身で一人暮らしだった。

周作の場合は、結婚歴はなく母親の死後、独居になった。英雄は三十年前に離婚後、両親と三人暮らしだったが、病気により両親が特別養護老人ホームに入所したので、十年前からは一人暮らしをしていた。

そんな彼らと会うのは年に数回だったが、バーベキューをしながら、いろんな話をした。職場内の不満から始まり、地元選出の国会議員の批評までと広がった。

陽子の生家がないのは、両親が相次いで死去後は、姉が

家と土地を処分して、墓も現住所地の名古屋へ移したからだ。ビルの十階にある寺でカードを入れ、暗証番号を入力すると、地下から位牌が上がつてくるらしい。

「きれいな所で掃除もしなくていい」

と姉は自慢したが、遠方を理由に参拝に行つたことはなかつた。陽子は墓地で落ち葉を掃き、線香の煙の中で思い出に浸るのが墓参りだと思つていた。

家の前の市道に軽トラが止まつた。運転席から転げるように走つてきたのは、周作だった。すぐ隣が彼の家なので、どこかに出掛けた帰りのようだ。陽子も急いで玄関から出ると、

「タイヘーン。キツネ様がイノシシの箱罠に入っている。助けて、お姉ちゃん」

周作の足音と声に、庭の落ち葉を漁つていたシロハラがキョキョと鳴いて飛び去つた。

周作は若い頃は長距離の選手だったが、今は軽トラックから陽子の家まで走つただけで、肩を上下に動かして荒い息をしている。四十年間肥育牛の生産者として実績を積んだ分、脂肪もついでしまった。

「腹が出たから、ご飯は茶碗一杯にした」

と以前説明したが、脂肪は減らずに今は痛風まで背負つて

いた。

「簡単よ。箱罠の入口を開けて出せば」

周作によるとキツネは有害鳥獣のリスト外で、対象鳥獣は、イノシシ、サル、タヌキ、アナグマ、アライグマ、シカと、カラスなどの鳥類らしい。それに、箱罠は猟期以外にも許可されていた。

陽子は周作から頼まれると、つい高圧的になってしまう。彼が小学校に入学してからは、三歳年上の陽子が一緒に通つた。登校中に「シッコ」と頼られると木陰に連れて行き、洩はらを垂らしているとちり紙で取つてやつた。

「いやだ。キツネ様の祟りが怖いよ。お姉ちゃん、助けてー」

今でも周作は、陽子を「お姉ちゃん」と呼ぶ。この年齢では恥ずかしくもあるが、弟のいない陽子は嫌ではなかつた。

周作がキツネを怖がるのには理由があつた。

彼の祖父は猟師だったが、雪の山でキツネを撃つた翌日に亡くなつた。現代なら急性の病だつたと思うが、以来、周作の家では祖父の命日の前日に、キツネ様へと手作りの稲荷ずしを供えていた。しかし、二年前に母親が他界してからは、コンビニで買った稲荷ずしですませていた。

「お姉ちゃんは今年度から福祉員だから、一人暮らしの

高齢者の見守りも大切な仕事だよ」

「二人暮らしの高齢者、周作がなの？」

「イエス」

福祉員とは市の福祉協議会の委嘱で、集落の高齢者の見守りや訪問活動をする人だ。問題を発見したら民生委員を通じて市役所に連絡をしてもらう。陽子は、集落の自治会長の高齢者に説得されて仕方なく引き受けた。

「高齢者宅の訪問は一緒について行くから。同じ人に何期も頼めないから、ねえ、お願い」

幼なじみである英雄の頼みに、陽子は渋々頷いた。しかし、本心は独居老人宅の訪問は避けたかった。この集落では、今まで三人が孤独死をしていた。一人で訪問して、そんな状況に遭遇したらと、考えただけでも恐ろしくてたまらない。

「福祉員ねー。今思い出したけど、まだ一回も高齢者宅の訪問は実行していないわ」

陽子は五月の連休後に、英雄と一緒に高齢者宅を訪問する予定だったが、直前になって英雄からキャンセルの連絡があった。彼の両親は特別養護老人ホームに入所しているので、急な呼び出しがあるようだった。

「それ、職務怠慢じゃないか。困った人の依頼にはすぐ動きなさいよ」

「キツネは箱篭を開ければすぐに出る。化かすとか祟りとか、まだ信じているの？」

陽子はそろそろ周作の願いを聞かなければと思った。なぜなら、この借家の大家は彼であり格安の家賃だった。もともと、保険の営業をしていた周作の叔母が建てた家で、独身の叔母が亡くなった後は周作が管理をしていた。この借家は重厚な家具類やエアコンつきだったので、陽子は新しい冷蔵庫と身の回りの品だけで入居できた。

「あれ、天気がいいのに雨が降り出した」

周作が両手を広げて空を見上げると、首の皺が伸び丸顔の頬が一段と赤くなった。まだ童顔が残っていた。

「お姉ちゃん、キツネ様の嫁入りが始まるよ」

周作はキツネには詳しく、祖母の話聞きながら成長させたせいか、今でも、キツネは人を化かすと信じている。例えば、親戚の家からの宴席の帰り、慣れた道を歩いていたのに麦畑に迷い込み、やっと帰宅して重箱を開けると、お土産のおほぎが馬の糞になっていた話。陽子はもう何度も聞いているので、

「馬を飼っていた時代のおとぎ話じゃない」

と今日も否定したが、

「一回化かされてみたら、きつとわかる。夢遊病者のようになるらしいよ」

肥育牛生産者時代は何度も全国優勝し、「上級肉質佐賀牛の育て方」と題して県知事と対談までしたのに、こと「キツネ様」に対しては子供のように怖がる。

周作はキツネのいる箱罨へ行くつもりで、軽トラの荷台から白い長靴を持ってきた。底から数センチ上までは茶色に汚れていて、歩くたびにブカブカと音が聞こえるのは、痛風の発作時に、親指の先が長靴の内側に当たらない大きなサイズのせいだ。

「行くわよ。周作が崇られる前に」

陽子は首から下げたスマホを確認した。一人暮らしになると家の鍵とスマホは肌身離さず持ち歩く。去年は凍った道で転倒し腰を強打した。その時は立ち上がったが、高齢者は何が起こるかかわからないと実感したからだ。

周作が六年前まで肥育牛を飼っていた牛舎をめざす。市道から下ると農業用の貯水池の堤に出る。この池には、秋から冬の間カモ類が飛来するが、今日は周作が軽トラで往復したせいか一羽もいなかった。長い堤を渡った場所にあるのが野栗の木で、陽子は晩秋にイノシシと先を争って拾う。イノシシはイガの割れ目を探してこじ開けると、二センチ前後の実を取り出し、それをかみ砕いて食べている。朝寝坊して出掛けると、食い散らかしたイガと皮だけが

待っていた。

箱罨は牛舎の前を通り過ぎた雑木林の中だ。

「お姉ちゃん、車の運転は気をつけなさい」

冬から春に花が咲くヤブツバキの枝を伐り、箱罨へ通りやすくした場所で周作が言った。

そこでも、シロハラがキョッと鳴いて飛び立った。今年 は早めに飛来した個体数が多いようで、陽子の家の周辺でも数羽を見かける。転居後に購入した野鳥図鑑によると、翌年の五月頃まで日本で過ごす冬鳥で、名前の由来は腹部が白いから。しかし、陽子が確認したシロハラは腹部が灰色の個体が多く、識別の難しさを実感していた。

「用心しているわ。高齢者だから言うの」

「気をつけても、イノシシからぶつかるケースがあるの。お姉ちゃんの場合は古い軽トラだから一撃で大破。はい、さよなら」

陽子が手伝うとわかったせいか、周作は優位に立ったような口ぶりだ。

「英雄の車は修理中だよ。三日前の夜にイノシシとぶつかったから」

英雄も小学校の一年間は、周作と陽子と三人で登校した。二年生になると妹が入学したので、英雄は小柄で歩くのが遅い妹を連れて早めに登校していた。

「あの高級車にイノシシが？」

「うん、運悪く」

周作は農葉の品名が印刷された帽子を取ると、薄くなった頭髪を掻いた。

英雄は定年退職後、「自分へのご褒美」と、赤い乗用車を購入していた。離婚後は長く一人で転勤生活をしてきたのだから、当然のご褒美だろう。しかし、軽トラが主流の集落では目立つ車だった。陽子も転居後、ここでの暮らしには不可欠なので、中古の軽トラを買っていた。

箱罨は雑木を伐り倒した、広場の真ん中にあつた。箱罨の周囲の赤土の上に、長靴の足跡があるのは、見回りと餌を撒いた周作のた。

キツネは箱罨の奥に前足を揃えて座っている。家庭犬の「オスワリ」の状態で、一見痩せた柴犬のようだ。正面に回ると、三角形の耳を立て、黒く光った鼻の両側から白い毛が後頭部へ向かって生えている。二人が近づいても不動のまま、野生動物の威厳さえ漂っている。しかし、それを口にする、崇りを信じる周作が怖がるので黙っていた。

「糞があつたら触るな。エキノコックスに感染するから。さつさと開けろ」

周作が命令口調になるのは、陽子に用心させるためだと

わかつている。

「ここでウンチするようなキツネかつ。周作とは違う」

「ここでしたのは、立ちションだけだ」

「ごめんね、早くお家にお帰り」

陽子はキツネにあやまった。箱罨の扉は重いので周作を振り返ると、離れたヤブツバキの陰から顔だけを出している。仕方なく全身に勢いをつけて扉を上げると、キツネは雑木林の奥に向かって走った。しなやかな細い体で飛ぶように逃げる姿は魔物のようで、白く光った尻尾は残像のように脛に張りついた。

「あの大きさなら、若いキツネ様だろう」

まだ合掌したままの周作が近づいた。離れていても、そこまでわかつたのは、有害鳥獣駆除の資格を有しているからだ。周作は電気止め刺し機で、箱罨に入ったイノシシを処分すると、尻尾と両耳を市役所に持参していた。しかし、成獣処分の場合は危険を伴うので猟師に依頼している。

「今年の箱罨には成獣が入らない。学習したのかな。アナグマが多い」

周作は腕を組み眉間に皺を作り、熟慮中の顔になる。

「二頭で尻尾が二本あるイノシシを狙つたら」

「そんなのがあるか。報奨金が目的じゃないよ。昔、小屋に侵入して牛の餌を食べられたからリベンジさ。サツマ

イモやサトイモは電気柵の中で作らないと狙われる」

「そうね、異常気象のせいで木の実が減ったか、野生動物が増えたのかな。今年のアケビはカラスに先を越されて食べられないよ」

「来年に期待するしかないね。俺、アケビは種が多くて食べにくいから苦手なんだ」

樹間に日が差し、葉を揺らして雨が降り始めた。濡れても気持ちよいくらいの雨だ。湿った葉は新鮮な匂いを放つ。淡い淡いミントの香りのようで、ここで長く暮らさないと気づかない芳香だ。

「あの子は嫁入りに間に合ったかな」

切れ長でつり上がった、キツネの美しい目を思い出しながら陽子が尋ねた。

「走りが速かったから大丈夫だよ。新婦の弟だったかもしれない。またキツネ様が入っていたらお願いね、お姉ちゃん」

「任せて。あんなに近くでキツネを見たのは初めてよ。精悍で野生美にあふれていたね」

まだ平常心に戻らない陽子は、スキップをしながら周作の後を追った。

「俺、箱鼠の中を掃除して新しい米ぬかを撒いて帰るわ」

陽子の家の前の軽トラまで来て、大きめの汚れた長靴からスニーカーに履き替えると、周作は運転席に乗り込んだ。バックミラーには蜘蛛の巣が張って、助手席は雑誌や汚れた作業着で散らかっている。

「ついでに、お願いがあるんだ」

「なんじゃ、まだあるのか」

二度目の依頼に陽子は強気になった。

「英雄を激励してよ。愛車が修理中で落ち込んでいるかもしれない。それに、一人暮らしで話し相手もないからね。郵便受けに新聞が溜まっていても生きているから。ねえ、新任の福祉員さん」

この集落は若者が少なく高齢者だけの世帯が多かった。だから、めったにない転入者はすぐに役員にされてしまう。陽子のように六十代でも、集落の人は若者として数える。それも仕方がない話で、数少ない若者が仕事に出た後の昼間は、高齢者ばかりになっていた。集落の人への見守り係の福祉員を依頼されたのは、信頼されているからと陽子は思うことにした。

三年前の定年直後に自治会長を任された英雄の家は、集落の端にあり、陽子の家からは歩いて五分ほどの距離だ。

市役所に勤めていた彼の父親は、亡くなるまで長く自治会

長を務め、家の前の畑では野菜作りをしていた。

周作が言ったように、英雄宅の郵便受けは新聞であふれ、庭には餅つき用の石臼が転がっていた。この石臼の定位置は三年前からだ。陽子なら、転がして庭の隅に移動させメダカでも飼いたかった。ゴルフボールが散らばっているのは、愛犬「ネギ」のおもちやだ。

インターホンを押すと反応したのはネギで、家の奥から鳴き声がある。三分ほど待ったが足音さえ聞こえない。もう一度押して出てこないなら帰ろうと思っていたら、縁側のガラス戸がゴトゴトと音を立てて開いた。

「生きてるかー」

これが二人のいつもの会話の始まりだ。英雄の白髪は肩までの長さに伸びているので、後頭部に輪ゴムで留めている。口の周囲の髭も伸びていて、カレーを食べた後は目も当てられないだろう。

「あ、陽子ちゃん。オハヨ、まだ寝てた」

英雄も小さい頃は「お姉ちゃん」と呼んでいたが、いつの間にか「陽子ちゃん」になっていた。

「ちよっとちよっと、理髪店に行つて少しはすつきりしたら」

陽子はいつも英雄への小言から始まる。英雄は「へへ」と、縁側のガラス戸を開けて沓脱石の上に腰を下ろした。

白地に水玉模様の寝巻のズボン、生地が破れて膝が見えている。自治会長は今日も疲れていた。

「車にイノシシが突撃したってね。体は大丈夫なの？」

「うん。修理に十日前後かかるらしい。オフクロが入所している施設からの呼び出しがあつて、その帰りに藪の中から飛び出したイノシシがぶつかつたんだ。うちの畑のすぐ側だつた。猪突猛進を体験してしまつた」

「畑って、その畑なの？」

英雄の両親が特別養護老人ホームに入所後、長く耕作放棄になつたままの畑だ。

陽子が転居してきた年は、周作がトラクターで起こしてくれたので、三人でコスモスとヒマワリの種を蒔いたが、花の時期には雑草の背丈に追い越されてしまつた。二年目は、兵庫県在住の英雄の弟が送つてくれた、「丹波篠山の黑豆」を蒔いたが、発芽後にイノシシに荒らされてしまつた。今年はやる気をなくして、また耕作放棄の状態に戻つてた。

「会社の営業車は低価格の自動車だつたから、定年後はいい車に乗りたかつたんだ。俺も陽子ちゃんのように、軽トラのポンコツを買えばよかつた」

ポンコツには反論したかつたが、事実だから黙るしかなかつた。

「でー、まだ愚痴があるなら聞いてあげる」

「ないよ。でも、軽トラの中古車を注文した」

「ポンコツをカー」

英雄は陽子を見上げるとクスッと笑った。

「忘れていたけど、五月の中旬に高齢者宅の訪問を中止したままだから、今月にでもどう？ 一緒に回る約束だったよね」

「あ、前は俺の用事でキャンセルしたね」

英雄は沓脱石から裸足のまま爪先立って玄関に行くと、草履を履いて出てきた。夜も玄関は施錠していないらしい。

「あの日もお母さんの具合が悪かったの？」

「いや、パトカーで巡回中の警官から、ケシを植えたのか疑われた」

家の奥からネギの音が聞こえる。トイプードルの雄で、毛は伸び放題で、目を合わせるには前毛をかき上げるのに時間がかかる。薄茶色の犬を選んだのは、「汚れが目立たないため」と言ったが、犬の美容室に連れて行ったのも、忘れてしまうほど昔らしい。

「畦道に寝転がってピンクのケシの花を眺めていると、警察官が近づいてきた。雑草の中に三畳ほどの広さに咲いていたけど」

「道端に咲くオレンジ色の小さなケシは見るけど、へー、

あのアツミケシが咲いていたの」

陽子は「市政だより」の写真で、植えてはいけないうケシの仲間を思い出した。

「質問攻めにあつたけど、故意に栽培したわけではなく、種がどこからか飛んできたとの結論になった。その日の夕方には作業服の人達が刈り取った」

「とにかく、高齢者宅の訪問日を決めてよ」

「そうだな、今日にしようか。一時間後、陽子ちゃん宅に行く。シャワーを浴びてシャンプーして、加齢臭を洗い流そう」

英雄は寝巻のボタンを外し上着の裏側の臭いを嗅ぐと、目を細めて肩をすばめた。

「今日、急にか。仕方がないな」

陽子は英雄と話すときも、つい言葉が荒くなる。

英雄は三十分遅れて十時に陽子宅に来た。黄色のジャンパーにズボンを着ていた。

「おう、馬子にも衣裳じゃん」

「現役時代はスーツを着ればモテた。まあ、飲み屋の話だけどね」

英雄からは甘い香りの整髪料が漂ってきたが、彼のことだから使用期限は過ぎているのだろう。